



出口王仁三郎と大本の思想

世界更新の藝術：出口王仁三郎と大本の「人類愛善」運動

The Art of World Renewal: Deguchi Onisaburo and Oomoto's 'Universal Love and Brotherhood' Movement

激動の時代が生んだ二人の巨人

時代背景：明治維新後の急速な近代化、資本主義の浸透、そして国家神道体制の確立。
伝統的な価値観が揺らぎ、社会に精神的な空白が広がる時代。



出口なお（開祖）：貧困の只中から神懸かり、祟り神と恐れられた「艮の金神」の啓示（お筆先）を降ろす。その思想は、近代文明への痛烈な批判（反近代・非近代）を内包する。彼女の霊性は「火」の如く激しく、根源的。



関係性：この「火水」の相克と融合が、大本の教義と運動の原動力となった。



出口王仁三郎（聖師）：類稀なるカリスマ性と組織運営能力を持つ思想家。なおの啓示を記紀神話と結びつけて体系化し、普遍的な教義へと昇華させる。彼の霊性は「水」の如く、万物を受け入れ、形を変えて広がる。

タイトル：第一次大本事件と『靈界物語』の口述

本文：

第一次大本事件（1921年）

「大正十年立替説」という終末論の流布を背景に、教団は不敬罪と新聞紙法違反で弾圧を受ける。これは国家からの最初の警告であった。

『靈界物語』の誕生

王仁三郎は神殿破壊の音を聞きながら、新教典『靈界物語』『靈物語』の口述を開始する。これは、なおの「お筆先」が「立替え」（破壊）に力点を置くのに対し、「立直し」（建設）のビジョンを具体的に示すものであった。

内容と特徴

全81巻に及ぶ壮大な教く物語。スサノオを主神とし、神・自然・人間の関係を問い直す。難解な教義や予言を大衆小説的な比喻で表現し、当局の追及をかわす意図もあった。王仁三郎はこれを「神示の創作」と呼んだ。

意義：近代の行き詰まりに対する「脱近代」の処方箋であり、後に展開される人類愛善運動の思想的源泉となる。



「夢かうつつか誠か嘘か、
ホンにわからぬ物語」

核心思想：地上天国を実現する「人類愛善運動」



『靈界物語』の思想を社会で実践するための具体的な行動綱領が「人類愛善運動」である。これは、地上に天国を建設するための青写真であった。

スローガン：人類は本来兄弟同胞であり、一心同体である。

対峙する思想：王仁三郎が近代文明の病根と見なした二つの思想、「われよし」（自己中心主義）と「つよいものがち」（弱肉強食）を克服することを目的とする。

目的：人種、宗教、国家など、あらゆる「垣根」を超越し、万物が神の愛のもとに和合する「みろくの世」の実現を目指す。

万民の言語：エスペラントによる「垣根」の撤廃

1923年、バハイ教との交流をきっかけにエスペラントを教団活動に正式導入。これは彼の国際主義の最も具体的な実践であった。

目的：国家や民族を分断する「垣根」を取り払い、ホマラニスモ（人類一家主義）を実現するための普遍的言語として位置づけられた。

王仁三郎の取り組み：自身も学習し、3600首の語呂合わせ歌からなる『記憶便法エス和作歌辞典』を著すなど、普及に情熱を注いだ。

実践：海外宣教用のパンフレットや機関誌『国際大本』がエスペラントで発行され、40ヶ国以上で読まれた。人類愛善運動の海外普及における最大の武器となった。



「国と人の境を知らず天が下に 鳴り響くなりエスペラントの声」

万神の魂：

「芸術は宗教の母なり」

王仁三郎は、神を「天地創造の大芸術家」と捉え、芸術活動を神の創造（むすび）を体感する最も重要な手段と位置づけた。

思想：「神様がわからないという人に、一本の花を見せてやれ。」自然の美しさに神の働きを見出し、芸術を通じて誰もが神性に触れることができると説いた。

実践：生涯に10万首以上詠んだ和歌、膨大な数の書画、そして第二次大本事件後の苦難の時期に生み出された3000個の楽焼茶碗「耀鱧（ようわん）」。

芸術の特徴：技巧よりも、神と共に生きる生命力そのものを表現する天衣無縫の多作主義。芸術は人間解放を目指す愛善「芸」術であった。





平和の武道：戈を止める「武」の実践

王仁三郎の武道観は、破壊や殺傷の術ではなく、**争いや対立を超越する道**であった。

武

「武」の再定義：「真の武は戈を止めしむる意でありまして、破壊殺傷の術は真の武ではありません。」

合気道の誕生：王仁三郎の側近であった植芝盛平は、この思想と大本の宇宙観に基づき、合気道（合気武道）を創始した。「合気は愛気である」という理念は王仁三郎に由来する。

和

理念：「戦わずして勝つ」。柔よく剛を制し、敵対者を言向け和す（ことむけやわす）こと。肉体と精神の調和（和）を通じて、人類愛善を体現する武道。

愛気



大地への回帰：農による神性（むすび）の体感

王仁三郎は、工業化と金銭万能主義が人間を自然から引き離したと考え、**農本主義**を重視した。

- **目的**：土に触れ、自ら作物を作り、収穫し、食べるという自給自足の営みの中に、神の生産力（**むすび**）と**惟神（かながら）**の大道を感じ得ることを教えた。
- **実践**：「大本理想社農園」を設立し、二毛作などを研究。特に農村の窮状を救うため「愛善陸稻栽培」を奨励した。
- **思想**：農業は単なる食料生産ではなく、神の創造活動に直接参与し、神人和楽のコミュニティを築くための神聖な営みであった。



危険な二重性：世界主義と「超国家主義」

王仁三郎の思想の核心には、人類的国際主義（ユニバーサリズム）と民族的国粹主義（ナショナリズム）という、一見矛盾する二つの要素が存在した。

超国家主義（Super-Nationalism）：彼が用いる「日本」は、単なる国家ではなく、世界の理想国家の原型であり、宇宙そのものを指す場合もあった（大日本国＝宇宙）。これは、政治的・歴史的な天皇ではなく、宇宙的な主神に繋がる「理想天皇」を希求する精神運動であり、国家神道の「国家主義」とは異質であった。

雛型理論（Prototype Theory）：「日本の立替え立直しは、世界の立替え立直しの雛型である」。大本で起こることは日本で起こり、ひいては世界で起こるという論理。これにより、日本の精神的革新が世界救済の青写真であると位置づけ、民族主義と国際主義を融合させた。



国家権力との衝突：二度の「大本事件」

第一次大本事件（1921年）

- * 容疑：不敬罪、新聞紙法違反
- * 背景：軍人や知識層への影響力拡大と、「大正十年立替説」の流布による社会不安。
- * 結果：王仁三郎に懲役5年の判決（後に免訴）。神殿の一部が破壊される。これは国家からの「警告射撃」であった。

第二次大本事件（1935年）

- * 容疑：治安維持法違反、不敬罪
- * 背景：800万人の賛同者を集めた政治運動団体「昭和神聖会」の結成。その影響力を革命の脅威と見なされた。
- * 結果：「大本を地上から抹殺する」という方針のもと、全国の施設がダイナマイトで徹底的に破壊され、信者多数が検挙・拷問される。未曾有の宗教弾圧となった。

虎穴の譬え：弾圧を逆手にとる思想

第二次大本事件の裁判中、王仁三郎は裁判長に問いかけた。
「人間が虎の穴に落ちたらどうすべきか？(人虎孔裡に墮つ)」

王仁三郎の答え：逃げても、抵抗しても食われる。ならば、自ら虎の口に入り
「食わせてやる」。食われれば何も残らないが、食わせれば愛と誇りが残る。

「食われるのではなく、食わせてやる」

思想的意義：

1. 受難の神聖化：弾圧を単なる敗北ではなく、神の経綸における必然的な試練、意図的な犠牲として位置づけた。
2. 純粹性の保持：この弾圧により、多くの宗教団体が強いられた国家総動員体制下の戦争協力を免れた。「戦争の時には戦争に協力し、平和の時には平和を説くというような矛盾した宗教団体では、世界平和の礎にはならん」。
3. 未来への布石：この「自己犠牲」が、戦後の活動の精神的な正当性を担保した。



垣根なき苑：戦後思想の到達点「万教同根」

1945年、敗戦による大赦令で無罪となり釈放。王仁三郎は教団を「愛善苑 (Aisen-en)」として再出発させる。

「苑」に込めた意味：「苑」の字には、あらゆる囲い（垣根）のない自由な世界への願いが込められていた。「大きな教会はどこにも建てない」と宣言し、物理的な建造物よりも精神的な繋がりを重視。

万教同根 (Bankyō Dōkon)：戦後の思想的結論。「すべての宗教は元は一つであり、万教は同根である、これが真理である」。キリスト教、仏教、神道などあらゆる宗教の根源は同じであるとし、排他性を完全に否定。人類愛善運動の普遍主義が、ここで最終的な形に結晶化した。



根源としての大本：後世への不滅の遺産

王仁三郎の思想と大本は、戦後の新宗教に絶大な影響を与え、「現代新宗教の一つの根源」と評される。

直接的影響:

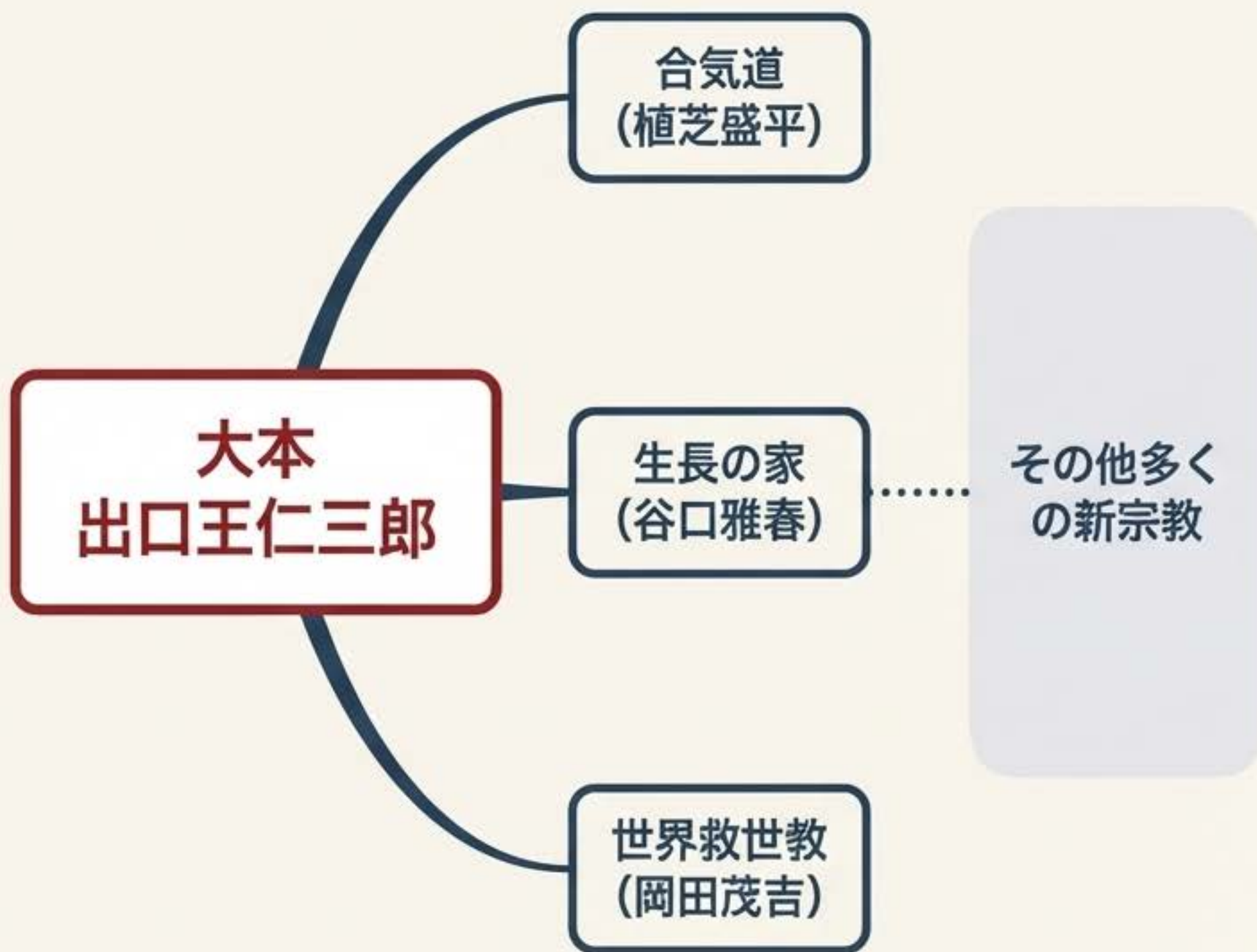
- 生長の家: 谷口雅春は元大本信者で、『霊界物語』の口述筆記者だった。
- 世界救世教: 岡田茂吉も大本入信経験を持つ。
- 合気道: 創始者・植芝盛平は王仁三郎の側近であり、その武道観は王仁三郎の思想を色濃く反映している。

間接的影響:

- 戦後に生まれた多くの新宗教が、その教義や組織論に大本の影響を受けている。

継続する活動:

- エスペラント普及活動は戦後も継続され、日本のエスペラント運動をリードし続けた。
- 王仁三郎の芸術作品、特に「耀瑩」は国内外で高く評価され続けている。



現代への問いかけ：王仁三郎の「脱近代」思想

出口王仁三郎の人類愛善運動は、単なる歴史的現象ではない。それは、近代合理主義の限界と、それがもたらす危うさを鋭く告発した「脱近代」の思想実践であった。

彼が生涯をかけて闘った「われよし」（自己中心主義）と「つよいものがち」（強権主義）は、形を変えて現代社会にも深く根を張っている。

* 現代的テーマとの共鳴

- * 環境問題：農業を重んじ自然との共生を説いた思想。

- * ナショナリズムの再燃：「垣根」を取り払おうとした国際主義。

- * 精神的空虚：芸術や生活の中に神性を見出すことで、心の拠り所を再建しようとした試み。

王仁三郎の闘いは、人間中心的な価値観の修正が迫られる21世紀において、我々が学ぶべきものを多く含んでいる。

主要参考文献

本スライドは、以下の研究に基づき構成されています。

廣瀬浩二郎（2002）「人類愛善運動の史的意義：大本教のエスペラント・芸術・武道・農業への取り組み」『国立民族学博物館研究報告』27(1): 1-24.

Stalker, Nancy K. (2008). *Prophet Motive: Deguchi Onisaburō, Oomoto, and the Rise of New Religions in Imperial Japan*. University of Hawai'i Press. (邦訳: 『出王仁三郎 帝国の時代のカリスマ』原書房, 2009年)

村上重良（1978）『評伝出口王仁三郎』三省堂.

出口和明（1995）『巨人 出口王仁三郎』講談社. (初版1967年)

フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia) 』「出口王仁三郎」「大本事件」の各項目

[SOURCE_IMAGE_1]